

住せしが、故主の御事也とて種々御馳走仕たると也。

一、陽廣公家督相續の御請

微妙公四十七歳にて御隠居御願調ふ。陽廣公と御父子御登城の所、公方御直に、肥前殿ははまだ隠居時分にて無之候に、無異儀國を被讓事奇特に候。筑前守厚く禮を被申尤に候と上意也。其時陽廣公謹て忝仕合、此上意を承り肥前守存分は御座有間敷と被仰上候。其後微妙公扱も今日筑前御請は出来たり。最早三ヶ國譲りて無心許事はなしと御喜悅也。

今被請

此陽廣公御請道理に相當る哉否や、愚意未領得。

一、賀州一向一揆服誅の事

天正の初年信長公越前國へ亂入し朝倉氏を滅し、其跡をば國人前波播磨守・富田彌六兩人に被下。此兩人中惡敷亂に及ぶ。彌六其時二十四歳、勝れたる美男なれ共偏跛也。勇材超人驕慢の心あり、先方の諸將を一度に四人殺害す。依之國人離心一揆起る。彌六物の數ともせず威を國中に振ふ。仍て賀州一揆共援を請ふ。一揆頭若林長門來て長禪寺山にて合戦す。長門が謀計にて彌六打負け、長禪寺山にて戦死

及び、飛州より被召還、千石被下置候。然るに武士に成ては殊の外勇氣衰へ、御家にては度々の軍に一度も手に不合、不首尾の事多く有之、御知行被召放行衛不知と云ふ。勝家の功にて越前加賀平均し、丸岡に柴田伊賀守、大野に柴田三左衛門、勝山に原彦次郎、賀州御幸塚に徳山五兵衛、仙代に拜郷五左衛門、寺井の三堂山に安井左近、別宮に吉原二郎兵衛、金澤に佐久間玄蕃頭、如此柴田家より城主を置たり。或時別宮に一揆起り、夜半に城下へ押寄る。次郎兵衛防之靜まりて居ければ、落つべき様もなし。然る處に大手の門櫓にて、足輕頭右の手に火繩を懸け、藥箱に有之藥を取て鐵炮に入ると、火繩の火箱の藥に移て、門櫓北の谷に打倒す。其勢に乗じ一揆ども迫入り、次郎兵衛自殺しぬ。籠城の兵ども不殘戦死す。一揆の老兵云様は、是より仙代へは四里也。拜郷はすゝどき男也。只一時もはやく引取可然と云ふ。皆不聞入、土藏を打やぶり、絹布・紙類取出し配分するとして、一揆の寄合分もなき内に、はや朝五過に成る。三坂が嶺に當て仙代の拜郷、赤旗指擧て押來る。すはや拜郷よとて遁散る。一人も洩さじと下知する所に、一揆の老兵の内

す。其後前波播磨も戦死しぬ。依之柴田修理亮勝家來て越前平治す。此勢にて賀州の一揆頭共も降參す。能美・江沼兩郡の一揆頭は柴田伊賀守に屬して、越前丸岡にて伊賀守へ禮をし、石川・河北兩郡の一揆頭共は佐久間玄蕃頭に屬して、賀州松任にて玄蕃頭に禮をす、べきに定めて、丸岡・松任兩所にて指圖をいたし、一揆頭不殘殺害して賀州平治す。此時若林長門年四十餘。法体し褊綴にさすがを指て出たるを、一刀切たるに不仕身にて不切。中取して突むとする所に、飛遠て障子のあなたへ遁出づ。龜田大隅殺之。松任にては須崎兵庫運參するに付、延引にて不首尾に成ては如何、兵庫一人は不苦とて不殘仕廻たる跡に、須崎松任町にて聞之、直に飛州へ出走す。或年の十月頃、越後の謙信一萬餘兵を帥て賀州河北郡中條村・大田村に軍ぢちす。其日大雪にて軍兵皆兩村の民家へ入り寒氣を防ぐ。夜中須崎兵庫八百許の人数にて山手へかゝり夜討す。さすがの謙信大に敗走し越後へ遁入る。此時の童謡に「越後をとりやる輝虎さまは、關東表はお照しあるが、加賀の鎗にはお曇りやる。のうお曇りやる。」と謳たると也。其後高德公右の手柄ども御聞

巖の上へかけ上り、棒に白手巾を結付て振てみせければ、拜郷は伏兵の有かと心得、人数をまとめて別宮の城中へ入りたり。手ばやき智略を出して多く助けたりと也。次郎兵衛は一萬三千石領之。五左衛門は一萬石領之。勇猛の人にて啼く子も拜郷といへば啼止ぬ。尾州人也。別宮の事 左衛門の事

一、御旗奉行岩田内藏助の事

大坂夏陣五月七日、岡山にて御旗奉行岩田内藏助・富永勘解左衛門高所に御旗を立たり。微妙公今少し旗を推出て立よと御意也。内藏助少し御待被成よと云ふ。公是非すゝめよと御意の時、内藏助御側へ近く參り何哉らん申上る。御合點とみゆ。少間ありて時分宜敷とて御旗をすゝむ。其時旗を一面に横に立たるを、内藏助下知し豎に立たり。然る處に先手崩れかゝりぬ。乍然旗皆豎に立たる故に、もめざると也。其後山森吉兵衛右の儀を岩田に問ふ。岩田云。御先手の様子少しはやくみゆるに付て、御旗をすゝめなば、先手衆御旗本かゝり給ふと思ひ無理をせば、討死多く候はんと思ひ、其段申上候也。又横に不立は先手の休いまだ勝とも負とも不見程に、若し崩るゝ事もあらばと思ひ如此と云。